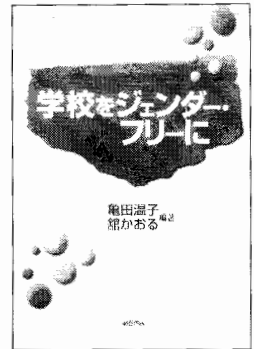


亀田温子・館かおる 編著

『学校をジェンダー・フリーに』

(2000 明石書店 366P ISBN4-7503-1287-8 C0037 2,800円+税)

堀内かおる



女の子がく女の子>としてつくれ、男の子がく男の子>としてつくれる、ジェンダーの再生産を担ってきた組織である学校。そしてまた学校は、子どもたちがジェンダーの呪縛から解放された自分らしい生き方を選択することができるように、彼女ら・彼らをエンパワーする組織でもある。学校の中で日々子どもたちに直接関わっている教師たちは、ジェンダーを無意識のうちに再生産してしまう問題性ととともに、学校のジェンダー構造を変えていくエージェントとなる可能性をも秘めた存在である。学校の中にジェンダー・フリーなエートスが満ちていなければ、子どもたちに対するジェンダーの再生産は限りなく繰り返されてしまう。この悪循環を止めるためには、学校自体がジェンダー・フリーな組織に変貌しなければならない。そのためには、まずは現在の学校にジェンダーに関連するどのような問題があり、子どもたちや教師にどのような影響をもたらしているのかを確認しておく必要がある。「学校をジェンダー・フリーに」と題する本書は、まさにこうした学校のジェンダー問題の「総論」ともいべき包括的な内容を持ち、学校に内在するジェンダー問題を知る入門書として最適かつ必読の書であるといえるだろう。

本書は序章から第16章に及び4つのパートに大別される内容となっており、序章、第1章のあとに「Part 1 学校生活と性別分化」「Part 2 教材創出・教育方法・教育政策」「Part 3 教師教育とジェンダー」「Part 4 ジェンダー・フリーな教育に向けて」という各パートに複数の章が含まれて構成されている。また、このほかにトピックスとして「持ち物の男女色分け」「音楽教育とジェンダー」「女性体育教員」がコラムとしてまとめられている。

まず第1章では、ジェンダー・フリーな教育を目指すこれまでの日本の取り組みが3つのステージを経て進展していることが示される。第1のステージは、「教育の機会均等、男女共学という制度的平等をめざした」ステージである。次の第2のステージは、「学校の内部構造・知識変革をすすめた」ステージである。そして第3のステージと

して、「教師教育・教育改革にジェンダーの視点を導入する」ステージがあり、現在はこの第3のステージに到達し、日本でも、教育を生成する構造から抜本的にジェンダー・バイアスを除去していこうという試みが展開されつつあることが論じられている。男女平等やジェンダーを教える「education on gender-free」ということから一歩進んでジェンダー・フリーな社会をつくるための教育「education for gender-free society」へ、そして学習を通して自分自身がジェンダー・フリーになるジェンダー・フリーとしての教育「education as gender-free」、学校生活を通してのジェンダー・フリーな教育「education through gender-free」へと、ジェンダー・フリー教育も多面的なアプローチが必要であることが指摘されている。以下の章では、こうした課題を受けて具体的な問題提起と解決に向けた提言がなされている。それでは次に、各パートで述べられている知見に関して詳しく見ていくことにしたい。

「Part 1」では、小学校でジェンダー・フリーな教育がどのように推進されていったのか、そのプロセスに関する現場からの報告(第2章)があり、エスノグラフィーによって「学校における性別カテゴリー」がどのように機能しているのかが明らかにされる(第3章)。また、女子マネージャー問題からクラブ活動におけるジェンダー差別も浮かび上がり(第4章)、体育・スポーツの場面でも周辺的存在としての女性(女子生徒)の姿が示される(第5章)。性別によって二分化されたジェンダー秩序によって維持されてきた学校に進学するということは、子どもたちにとって、ジェンダー秩序に組み込まれていくことを意味する。進路選択は、まさに子どもたちがジェンダーにしたがって生きるか、それに対抗した人生を切り拓くかという方向性を決める出来事でもある。性別によるトラッキングが潜在化している現在の学校において、後者の道は未だ険しい(第6章、第7章)。

このように、教育の「現場」には、今まで不問とされてきた多様なジェンダー問題があることを、本書は見事に具体的に表している。これらの問題の解決へ向けた方策が、

次の「Part 2」で論じられることになる。

「Part 2」では、まず直接授業の中で使用される教材に目が向けられ、ジェンダー・センシティブな教材の開発における留意点が、事例をもとに論じられる(第8章)。「ジェンダー・フリーを目指す男女平等教育」の目標として示されている「ジェンダー形成要因の明確化」、「ジェンダー規範の概念砕き」、「ジェンダーにとらわれない意思の形成」、「男女の共生感の育成」、「ステレオタイプにはまらない能力の形成」の5点は、ジェンダー・フリーな教育を具現化する上での指針となる。教材の作成にあたっては、「性教育や人権教育、道徳教育や学級活動等の既教材から、男女平等教育に関連する題材を借りて再構成する」方法、各教科の既存の単元の中に「男女平等教育の目標や観点を盛り込むかたちの教材化」による方法、「『男女平等教育』としての独自の教材をつくる」という方法の3点が想定されている。「男女平等教育」すなわち「ジェンダー・フリー教育」が教師たちにある特別の領域として特化して受け止められるよりは、学校内のあらゆる教育活動の根底にジェンダー・フリーな教育理念が深く浸透して教育実践が展開されている、という状況を目指すべき教育現場の姿なのではないだろうか。そのためには、各教科の視座から、その教科で使用する教科書をはじめとする教材を見直すとともに、ジェンダーに配慮した教材を用いたジェンダー・センシティブな授業づくりを進めていかなければならない。各教科教育におけるジェンダー・フリー教育の実践例は本書には示されていないが、「学校をジェンダー・フリーに」するためには個々の教科からのアプローチも不可欠である。

また、ジェンダー・フリーな教育を推進していくためには、その理論基盤としての教育学説が支えにならう(第9章、第10章)。「フェミニスト・ペダゴジー」とは平等で公正な社会に向けて変革するための教育活動をフェミニストの視点から探ろうとするものである。フェミニスト・ペダゴジーが教育学にもたらした新たな視点は、教育実践においても大くの示唆を与えてくれる。「知識を拒否するのではなく、学び、疑い(批判し)、乗り越える(=自分たちの知識に再構築する)ような教育活動」の展開を期待したい。

ジェンダー・フリーな教育が実践され広く浸透していくためには、教育環境が整備される必要がある。このことは、教育政策としての課題でもある。イギリスでは、教育行政のリーダーシップのもとで、保護者や教師への啓発活動が行われてきた(第11章)。ジェンダー・フリーに変わるべき所は学校だけではなく、家庭や地域まで視野に入れたアプローチが必要だ。トップダウン方式の問題点もある

うが、教育の場にジェンダー・フリーな変化を生じさせる契機となり改革を継続させるために、行政との連携もまた不可欠であろう。

「Part 3」では、教師に焦点が当てられている。学校の中には、「女性教員」に対するステレオタイプな見方がある。それは、「女性教員」の職業的能力を疑問視するものであり、根底には女性一般に対する差別意識が存在している。学校もまた「男性=標準」と見なす組織にほかならないのである(第12章)。ジェンダー・フリーな教育のために、このような学校の構造的な問題から問われなければならない。

教師教育へジェンダーの視点を導入する試みは、日本においてはまだ緒に付いたばかりであるが、スウェーデンでは教育改革を背景に成果を上げてきている(第13章)。教員養成の段階でジェンダーの視点を取り入れた必修科目が設定されているとのことであり、日本においても早急に同様の措置がなされるよう願わずにおれない。まずは教師自身がジェンダー・センシティブになり学校教育に内在するジェンダー問題に気づかなければ、学校も、子どもたちも何も変わり得ないであろう。教員養成を経て教師になってからも、自己教育として教員研修においてジェンダー・フリーな学習を行うことが不可欠である(第14章)。

「Part 4」では、本書のまとめとして、今後のジェンダー・フリーな教育に向けた課題が示される。ジェンダー・センシティブな視点を身につけた教師たちによるジェンダー・フリー教育の実践は、潜在的カリキュラムの中のジェンダー・バイアスを是正することから始めなければならないだろう(第15章)。教科書の中に浸透しているジェンダー・バイアスを見抜き、ジェンダー・フリーな教材を使いこなす力量が、教師には求められるのである。そして、「女性政策(男女共同参画政策)と教育政策・運動・実践・研究の連携」こそ、今後の日本のジェンダー・フリー教育の推進を握る鍵となる(第16章)。

まさに学校は、ジェンダーに満ちた社会の縮図である。子どもたちは子どもたちなりに、ジェンダーと日々対峙しながら、「自分自身として」の生を生き抜こうとしている。子どもたちの生活世界に張り付くジェンダーへの気づきを促し、ジェンダー・フリーな感性を持って人生を切り拓く力をつけるファシリテーターとしての役割を、教師をはじめとする大人たちは担っている。学校をジェンダー・フリーに変えていくために、まず必要なのは、大人たち自身の自己改革だといえよう。学校内のジェンダー構造に気づいた大人たちが取り組むべき方向性と変革の可能性を、本書は示唆している。

(ほりうち・かおる 横浜国立大学助教授)